

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	「偉大な理想」の終焉とカザンザキスのギリシア性：独逸滞在期(1921-1925)における動向を中心に
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア, 24 : 19 - 31
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046844">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046844</a>
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



# 「偉大な理想」の終焉とカザンザキスのギリシア性

—独唄滞在期(1921-1925)における動向を中心に—

福田 耕佑

京都大学文学研究科博士課程後期

日本学術振興会特別研究員

## 1. はじめに

本稿では、ニコス・カザンザキス<sup>1</sup>がドイツ・オーストリアに滞在した時期の、文学作品とギリシア観について取り上げ、確かにこの時期ギリシアに関する主題から離れ共産主義や仏教に関心を抱いていたが、ギリシアの「東方性」という観点ではこの時期以前の観点を維持し<sup>2</sup>、この時期に書かれた思想的名著『禁欲』へとカザンザキスの思想が統合され始めたということを明らかにする。特に1922年は19世紀中頃より唱え始められた、ギリシア・ナショナリズムを体現した思想である「偉大な理想」<sup>3</sup>の頓挫するスミルナの大火<sup>4</sup>の発生した時期であり、多くのギリシア人達と共にカザンザキスもこのスミルナの大火に大きな衝撃を受けた。ドイツ・オーストリアに滞在する以前の時期をナショナリストとして過ごしたカザンザキスが、この歴史的イベントに対し政治的に関心を示すことがなく、ギリシア・ナショナリズムから距離を置いていたことも併せて記述したい。

## 2. 先行研究の紹介と本稿の意義

カザンザキス本人が該当期にナショナリズム的な思想を捨てたと証言していることもあり<sup>5</sup>、先行研究でも共産主義や仏教との関連が中心に論じられ、カザンザキスのナショナリズム的な思想やギリシア・ギリシア人観に関しては十分に論じられていない。

包括的な伝記を含めた研究としてジャニオ・リュストの研究<sup>6</sup>と、カザンザキスの全劇作品を取り上げたペトラコスの研究<sup>7</sup>が挙げられる。しかし、ここ

では先述のように共産主義と仏教、そして『禁欲』の思想が関心の中心であり、カザンザキスとギリシア<sup>8</sup>という枠組みでの議論は見受けられない。「東方」という観点に関しても、ツィニコプロスがカザンザキスの『禁欲』の「沈黙」の章に仏陀の思想の影響が見られると述べるにとどまり、カザンザキスの「ギリシア性」と関連させる形では論じられていない<sup>9</sup>。これに対しビーンは、カザンザキスのプレヴェラキスに宛てた書簡の中に見られる、カザンザキスが1923年以降ナショナリストではなく左翼陣営に属していたという本人の記述を引用し、またカザンザキスのスミルナの大火への反応を取り上げている<sup>10</sup>。しかしこの主題が中心になることはなく、例えば第五章で取り上げるカザンザキスの著作『饗宴』においても、ギリシア・ナショナリズムや「西方と東方」というモチーフが描かれているが論じられることはなかった。そこで本稿はこの時期のカザンザキスのギリシア観に関する知的動向について整理し、彼の生涯と作品群の中での該当期の位置づけを確かめたい。

### 3. 該当期のカザンザキスの動向

本章ではカザンザキスがドイツ・オーストリアに滞在していた1922年から25年までのギリシアの状況と彼の動向を、カザンザキスが妻のガラテアに宛てた書簡及び先述のビーンとジャンニオ・リュストの研究に依拠しながら記述する。

#### 3-1. 独塊滞在期以前(-1922年5月)

ここでの記述は福田(2017)に基づき記述する。カザンザキスのナショナリストとしての活動は、文学的にはイオン・ドラグミス<sup>11</sup>に、政治的にはエレフセリオス・ヴェニゼロス<sup>12</sup>に大きな影響を受けていた。特にヴェニゼロスとの関係は、1912年のバルカン戦争にカザンザキスが志願兵として従軍した際に彼の事務所で勤務したことに始まり、彼の下でギリシア政界と関係を持つことができた。そして1919年5月には、ヴェニゼロス内閣下で厚生局局長に任命され、ポントス人難民支援帰還事業に携わっている。しかし1920年11月にヴェニゼロスが選挙で敗北したことを受け厚生局局長を罷免され、パリやオーストリアなどのヨーロッパ旅行に出かける。1921年8月にはクレタ島に帰郷し、友人や家族と過ごしている。このように1920年までは対外拡張政策を行っていたヴェニゼロスの下でギリシアの政界と関係を持っていたが、彼の選挙での敗北を機に政権側とは一切の関係を断つようになる<sup>13</sup>。次節以降で確認してい

くようにこれまで深い関係を持っていたナショナリズムや「偉大な理想」を推進する運動から離れ、共産主義や社会主義に傾倒していく。

### 3-2. 独塊滞在期(1922年5月 – 1925年10月)

本節ではカザンザキスが1922年5月から25年10月までのドイツとオーストリアに滞在した期間のカザンザキスの動向について確認する。1922年5月、ユーゴスラヴィアを経由してウィーン遊学に向け出発し、同月19日に到着している。しかし6月から8月にかけて重い病気にかかってしまったが、この中でも8月7日にはこれまで十分に触れることのなかったアジアの文化とロシアの文化に関する本を購入し、特にロシア文学に関する研究書を購入し読んだことを妻のガラテアに手紙で書き送っている<sup>14</sup>。また二日後の9日には思想的著作『禁欲』に関する初めての言及を行っており<sup>15</sup>、フロイトや仏陀<sup>16</sup>に関する著作、またゴーリキーやルクセンブルクの著作、そして共産主義系の雑誌を読んでいる<sup>17</sup>。このような読書体験からも、ギリシアに居た時期よりもその関心が更に多岐に渡っており、妻への手紙の中でもギリシアに関する記述が減少し、ここで得た新しい知識に関するものが増えている。

ここで着目すべきこととして、カザンザキスはギリシア時代に共産主義や社会主義等の思想に傾倒していたのではなく、ウィーンで得た書籍や人脈を通して共産主義や社会主義に出会ったといこうとである。というのもギリシア共産党の設立が1918年4月であり<sup>18</sup>、「偉大な理想」に関してカザンザキスに大きな影響を与えていたヴェニゼロスとイオン・ドラグミスの影響を離れる1922年以前に、反ユダヤ・反共産主義的なヴェニゼロスの強い影響下にあったカザンザキスがこれらに触れていたとは考えられず、現にその時期にカザンザキス本人による共産主義や社会主義に関する言及も見られないからである。

同年9月1日、カザンザキスはベルリンに移動している。そして9日、ベルリンでスミルナの大火により小アジアのギリシア領が全て失陥したことを耳にする。独塊期以前にカザンザキスが傾倒していた、「偉大な理想」の崩壊をも意味するスミルナの大火に対する彼の反応は次章で扱いたい。

10月1日にはベルリンで教育改革に関する会議に出席し、16日にはドレスデンで性教育に関する会議に出席して「アラビアのニコス」と署名している<sup>19</sup>。特にドレスデンでの性教育に関する会議では主催者達と接触したことをカザンザキス本人が明らかにしているが、この会議の具体的な内容、またどのような人物がその場に出席していたのかは明らかにしていない<sup>20</sup>。年末、妻ガラ

テアに宛てた手紙の中で、カザンザキスはロシアに行こうとしていることを言及。しかし人脈、手段、時期、目的については触れられない<sup>21</sup>。1922年の文学活動としては、ギリシアで彼の戯曲『オディッセアス』が出版された。

1923年春季、4月に思想的著作『禁欲』を書き上げ、再度『仏陀』に着手したが完成を見なかった。またゲオルギオス・パパンドレウ<sup>22</sup>によってギリシアの図書館の館長職就任を斡旋されるも断っている<sup>23</sup>。5月1日には王宮の前やホーエンツォレルンの像の前で行われた集会に参加し、ヴェニゼロスの影響下に留まっていれば考えられなかったような政治活動の場に身を置き続けている。

同年6月からドイツを離れるまではドイツ国内旅行に時間を費やしている。6月にドルンブルク、ナウムブルク、ヴァイマールの順に出かけ月末にベルリンに戻っている。この旅行の中でも政治的な活動も行っており、6月7日にはドルンブルクからの手紙の中でウィーンの共産主義者やベルリンの共産主義者、知識人、芸術家たちと連絡を取り合っていることを報告している<sup>24</sup>。7月半ばには再度ナウムブルク、バルト海のプショヴへの旅行に出発する。8月には、南へ赴き、ミュンヘン、ウルム、ローテンベルク、ニュルンベルク、バンベルク、ルドルフシュタット最後にベルリンへという経路で旅行している。そして12月18日のガラテアへの手紙の中でドイツを離れる準備を始めていることを明らかにしている。

1924年1月18日、カザンザキスはイタリアに向けて出発する。2月26日アッシジに到着する。この間フレンツェやローマ等イタリアの都市に滞在しながら『仏陀』の執筆を終了させている<sup>25</sup>。4月29日、イタリアでの滞在を終えギリシアに向けて出発し、5月5日から7月5日までアテネに滞在している<sup>26</sup>。8月には郷里のクレタ島・イラクリオに帰郷し、ここで現地の共産主義運動に関与していく事になる。

1925年、2月5日にはイラクリオの聖ミナス大聖堂の前で共産主義者による大規模な集会が行われ、カザンザキスも自身の書いた文書の故に2月14日に逮捕されている。この文章はネア・エフィメリス誌に投稿されたが、この文章の中で彼はギリシアの階級闘争の未実現に触れ、ギリシア人の啓蒙と倫理性の改善のために教育の改革を「我々の義務」として訴えている<sup>27</sup>。またキリスト教の教義になぜ十全に従うことが出来ないのかという主題でも同誌に投稿している<sup>28</sup>。7月にはアテネへ、そして9月はキクラデス諸島で時間を過ごし、この時期に『饗宴』を書いていたと推測されている<sup>29</sup>。この後アテネに戻り、

10月13日にはアテネのエレフセロス・ロゴス紙の特派員としてソヴィエトに派遣されているが、これ以降の彼のロシアでの動向は稿を改めて論じたい。

#### 4. スミルナの大火への応答と「偉大な理想」の払拭

##### —妻ガラテアへの手紙より—

本章では1922年のスミルナの大火と、以前までカザンザキスが傾倒していたギリシア・ナショナリズムや「偉大な理想」の挫折に際し示した反応と後の共産主義や『禁欲』等のより普遍的な思想に繋がっていく道筋を明らかにする。

先述の通りカザンザキスは独逸期以前、中央の政府の中で「偉大な理想」に共鳴するナショナリストに近い立場に立ち、政治・執筆活動を行っていた。この背景を前提とした上で、妻ガラテアに宛てた手紙の中からカザンザキスのスミルナの大火への反応を見ると、第一に、そもそもこの事件についてほとんど言及せず、領土や政治的な観点からの発言もない、という点は指摘せねばならない<sup>30</sup>。これは先述のカザンザキスがナショナリストとして行動していたことを考えれば、領土拡張運動の頓挫について政治的な観点から何も書いていないことは注目に値する。

また22年9月に妻ガラテアに宛てた手紙を分析すると、カザンザキスはこの出来事を、ギリシア人とトルコ人が犯した人間性への罪として表現している。例えば、カザンザキスは「ギリシア人とトルコ人が小アジアで行った虐殺と不名誉に関して、文明化された世界に対してだけではなく(尤も今日そんなものは存在していないが)、人類の使命に対しても抗議することのできる、ギリシアに居住しているギリシア人に私たちはなっていなければならなかったのだらう<sup>31</sup>」及び「ギリシアを純粋なままに保っておこう。少なくとも私たちだけは、私たちの心の中で。(中略)ロミィ<sup>32</sup>の犯した不名誉はトルコ人の犯したものに匹敵する。遠慮なく言わせてもらえば、今私達の関心を捕らえているのは人類だ。ギリシア人とトルコ人はこの人類の価値を貶めたのだ<sup>33</sup>」と書き送っており、ギリシアとトルコ間における政治紛争をギリシア人の立場という一方的な立場から非難するのを避けたにとどまらず、このスミルナの大火を二国間の政治的な問題としてではなく、人類に不変な倫理の問題として取り扱っている。このような倫理という観点からカザンザキスはギリシア人に対し「もう一つ言っておけば、ギリシアというのは何人かの人々、いや、ごく極めてわずかな人々のことを指している。ギリシアの価値はそのような人々にかかって

いる」と書いているが<sup>34</sup>、これは決して領土獲得運動の失敗という政治的な観点からなされたものではない。

このように、カザンザキスはスミルナの大火をナショナリズムや政治の問題としては捉えずに、人類に普遍的な倫理の問題として捉えている。そして更にここから一步踏み込んでカザンザキスは、スミルナの大火を受けて思想した倫理に関する考察を『禁欲』の思想に結び付けていく。例えば 22 年 9 月の手紙で、「……だがもし目的を定めねばならないのなら、物質を精神に変化させる、とでもしておこうか。このギリシア人たちの不幸は後になって、もっと後の世代に、次の二つの内のどちらかの結果をもたらすことだろう。今のギリシア全体の破滅となるか、ある叫びの血と涙に養われた向上と開花であるか<sup>35</sup>」及び「もし日々の細々とした細部に引きこもってしまうのであれば、ギリシア民族のたどったこの全冒険を、私たちの小さな生涯に比べればはるかに広大な時間間隔の中に定立することはできやしないだろう。私は、自分の心の叫びを越えて、私の生きる時代の外側に人類の激動を見ているのだ<sup>36</sup>」と書き送っている。ここに現れている「叫び」(Κραυγή)は、思想的著作『禁欲』の中で「神」として表象される存在であり<sup>37</sup>、後年特に 1945 年からのギリシア内戦期に書かれた作品では文学上のライトモチーフとしての役割も果たしている<sup>38</sup>。まだこの段階では後の作品において見られる程に「叫び」が彼の思考法や表現の中で根本的な役割を果たしているかどうかまで判断できないとしても、「叫び」に促された「向上」や<sup>39</sup>、この「叫び」へと思考を集約させていく発想を用いながら歴史事件としてのスミルナの大火を理解しようとしていることは明らかである。

ここまでをまとめると、スミルナの大火に対して、1920 年までに属していた政治的な立場からの考察及び発言は見られず、ギリシアの政治的利益や「偉大な理想」といった観点からの発言はなかった。この時期のカザンザキスの中心的な関心は、共産主義や仏教等の新しく触れた知識の咀嚼と、『禁欲』といった自分の哲学的思想の構築であり、『禁欲』で見られる思想に寄せてスミルナの大火を語りはしたが、スミルナの大火がカザンザキスの関心の中心になることはなかった。

## 5. スミルナの大火への応答と「偉大な理想」の払拭 —『饗宴』より—

本章ではカザンザキスの作品『饗宴』(Συμπόσιον)を取り上げ、登場人物達の対話で表現されるカザンザキスの「偉大な理想」に対する考え方の変化や、

カザンザキスの関心が共産主義や仏教等の探求のみではなく、同様に東方的なものの探求にも関心を持っていたことを明らかにしたい。

この『饗宴』は、先述のように 1925 年前後に執筆されたと推測されており、カザンザキスの死後に遺品の中で原稿が発見され、1971 年に刊行されている。物語はカザンザキスが投影された主人公アルパゴスの家にイオン・ドラグミスとアンゲロス・シケリアノス<sup>40</sup>といった、独壊期以前にカザンザキスが懇意にしていた人物が投影されている友人たちが訪れ、酒を酌み交わしながら様々な議論を交わす対話篇のような作品である<sup>41</sup>。『禁欲』の主題を基底に置きながら<sup>42</sup>、カザンザキスは創作上の主題として「神、女、戦い」の三つに言及している<sup>43</sup>。そしてこの彼はこの作品の第二章で登場人物たちの対話を通して「ギリシア性」と「偉大な理想」について言及している。ビーンの先行研究では、この著作を通してカザンザキスが「政治的な動物(zoon politikon)」としてではなく、生と死の意味を探求しようとする「形而上学的動物(zoon metaphysikon)」であろうとしたと結論付け、このために哲学を欠いた「行動主義」や「芸術の為の芸術」といった姿勢を乗り越えようとしたと結論付けられている<sup>44</sup>。そのため、この著作の中でカザンザキスのギリシア・ギリシア人観や東方的なものの探求といった観点が話題にはなっていない。

独壊期とそれ以前との間の「偉大な理想」に対する態度の差異を考える際には、イオン・ドラグミスの投影された登場人物コズマスとアルパゴスの間の対話が重要であろう。このコズマスは、作中において現代ギリシアの隆盛とコンスタンティノーブル(現イスタンブール)奪回に熱意を燃やしている人物として描かれている。「私がギリシアを救うのだ」と宣言し<sup>45</sup>、ブルガリア人が占拠していた地区にギリシア人学校を設立しに行った人物として描かれる等<sup>46</sup>、これはブルガリアの間で領土問題のあったマケドニア地方に対し、「もし私達がマケドニアを救うために駆け付けるなら、マケドニアが私達を救うであろうことを諸君は知れ<sup>47</sup>」と述べ、実際に義勇兵としてマケドニア獲得闘争に従軍しブルガリアの危険性を訴え続けたドラグミスの行動にも一致している。

独壊期以前は大いにドラグミスに傾倒したカザンザキスだったが、この『饗宴』においては、アルパゴスの口を通してコズマスがギリシアに対して行った行動に関して否定的な言葉も肯定的な言葉もかけることはなく、また彼の行動に対しほとんど直接評価を加えていない。「...なぜなら今でもあなたは、自分が奉仕している戦いの目的を十全に生きられていないからなんだよ。ただそうすることを求めれば、あなたは自由を得るのだ。なぜなら、こう生きるこ

とで、あなた自身の全目的を成すことができるからだ<sup>48</sup>」のように反応している。前章で取り上げたカザンザキスのスミルナの大火への反応のように、ここでもコズマスの行ったナショナリズム的行動に対して政治的な観点から反論や非難、及び評価を下してはいない。これに関してビーンは、コズマスの素朴な「行動主義」に対する不同意を示すことで、思想する作家として相応しくないカザンザキス自身の「行動主義」的な側面に自己批判を加えていると述べている<sup>49</sup>。そしてここでも同様に「戦いの目的」や、「自分自身の自由ではなく超越者の自由を求めることが自分の自由につながる」といった『禁欲』において表明された思想にコズマスの「偉大な理想」やナショナリズムに対して行った行動を還元していることが明らかであろう。

また、1915年にアトス山でカザンザキス共に時間を過ごし、第二次世界大戦期においても依然として西洋文明の祖として古代ギリシアと、その古代ギリシアの末裔である現代ギリシアという意識で著作を続けた、シケリアノスの投影された登場人物ペトロスに対する主人公アルパゴスの応答について取り上げたい。ビーンはカザンザキスが『饗宴』を通してシケリアノスの耽美主義的な態度を避けようとしていると述べている<sup>50</sup>。しかしビーンはアルパゴスがペトロスを批判する際に「東方と西方」のモチーフを利用していることに触れておらず、実際このペトロスの親西欧的な態度に対しアルパゴスは次のように述べている。

あなたもフランク的な関心によって彷徨い出てしまい、病人のように金切り声を上げながら女性を賛美し、疲労、悲嘆、倦怠を歌い上げ、今はフランクの風に揺さぶられながら、もう死んでしまった神々を暖めている。だが、フランクも過ぎ去るのだ。奴らの神々だって地に墮ち粉々になってしまうのだ。(中略)フランクが過ぎ去ったとして誰が喜び踊り出すだろうか！幾千もの不信心な御者が殺され、そして見よ、東方(στην Ανατολή)という、我々の大地における至高の責任とは、新しい意味と情熱的な希望を生命に与えるということだ<sup>51</sup>

ここで言われているフランクは西欧を指しており、シュペングラーの『西洋の没落』に影響を受けたカザンザキスが<sup>52</sup>、西欧に対し「(中略)もう死んでしまった神々を暖めている。だが、フランクも過ぎ去るのだ。奴らの神々だって地に墮ち粉々になってしまうのだ」と述べながら、シケリアノスのほとんど無

批判に西欧に追従していく態度を揶揄しているのもであろう。このようなシケリアノスの姿勢に対しカザンザキスは、「我々の大地」であるギリシアを「東方」として表象している。カザンザキスは既に 1917 年の妹・アンゲラキに宛てた書簡の中で、自身の精神上的の祖先を「ムスリムの礼拝の行われている東方」と表現しており<sup>53</sup>、これは本稿 3 章 2 節で確認したように「アラビアのニコス」と署名していたことと合わせて考え、彼のギリシア・ギリシア人観の探求においてギリシアを「ギリシア古典」や「西欧の文化的揺籃」以外に捉えようとする意識が継続されているのが明らかである。

## 6. 本稿のまとめ

本稿を通して、「偉大な理想」の崩壊とスミルナの大火に直面したカザンザキスが示した反応を、主に独塊滞在期の伝記的な事項を整理しながら示した。妻ガラテアに宛てた手紙や『饗宴』の分析を通して、カザンザキスがギリシア・ナショナリズムや政治的な関心を離れて思想的な主著『禁欲』で見られた思想やギリシア・トルコといった枠を超えた倫理に基づいてスミルナの大火を理解しようとしていたことを明らかにした。2 章で見た、カザンザキス本人がプレヴェラキスに宛てた発言からも、この時期にカザンザキスが独塊期以前に傾倒していたギリシア・ナショナリズム的思想とは距離を取っていたことが明らかであろう。また、ギリシア・ギリシア人観に関しても、単にギリシアを西欧や古典古代とのつながりで探求しようとしたシケリアノスへの言葉に見られたように、1917 年のアンゲラキの手紙にも見られたギリシアを東方と結び付けて捉える姿勢が見られることは注目に値しよう。1925 年にはギリシアと同じく東西の中心<sup>54</sup>であるロシアに赴くことになり、現地でのロシア人やギリシア人、そして中央アジアや日本人、そして中国人との出会いもカザンザキスの東方観と共産主義観に影響を及ぼしていくが、これは稿を改めて論じたい。

## 参考文献

### 一次文献

- Καζαντζάκης, Νίκος (1993) *Επιστολές προς Γαλάτεια*, Γ' έκδοση, Δίφρος, Αθήνα.  
Καζαντζάκης, Νίκος (2007) *Ασκητική: Salvatores Dei*, Εκδόσεις Καζαντζάκης Αθήνα.  
Καζαντζάκης, Νίκος (2009) *Συμπόσιον*, Εκδόσεις Καζαντζάκης, Αθήνα.  
Καζαντζάκης, Νίκος (2010) *Ταξιδέροντας Ρουσία*, Εκδόσεις Καζαντζάκης, Αθήνα.



---

後はソフリス内閣へ入閣する。48 年からはフランスに移住し、執筆に専念する。そして 57 年フライブルクで客死する。

<sup>2</sup> 福田 (2017) を参照。

<sup>3</sup> Μεγάλη Ιδέα : 18 世紀に唱えられた民族統一主義運動。この思想の発生過程に関しては Πολίτης(2009) を、またカザンザキスとの関わりについては福田 (2017) を参照。

<sup>4</sup> Καταστροφή της Σμύρνης : 1919 年にギリシア軍は小アジアへの出兵を行っていたが(第二次希土戦争)、トルコ軍の反攻により押し戻され、1922 年 9 月には小アジアにおけるギリシアの中心地であったスミルナが陥落し、多くのギリシア人達が小アジアからの避難と落命することになった事件。またこの後 1923 年にローザンヌ条約が結ばれ、ギリシアの小アジア失陥が確定され、「偉大な理想」は名実ともに不可能なものとなった。

<sup>5</sup> Πρεβελάκης (1984 : 464)

<sup>6</sup> Janiaud-Lust (1970)

<sup>7</sup> Πετράκος (2005)

<sup>8</sup> Bien (1989 : 99-101)

<sup>9</sup> Τσινικόπουλος (2017 : 24)

<sup>10</sup> Bien (1989 : 55)

<sup>11</sup> Ίων Δραγούμης (1878-1920) : 外交官でありギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のある Στέφανος Δραγούμης (ステファノス・ドラグミス)。バレス、ニーチェに影響を受ける。主著『サモトラキ』(*η Σαμοθράκη*)、『ギリシア文化』(*Ελληνικός Πολιτισμός*)、『私のヘレニズムとギリシア』(*Ο Ελληνισμός μου και οι Έλληνες*)。

<sup>12</sup> Ελευθέριος Βενιζέλος (1864-1936) : 9 期、12 年にわたって断続的に長期間首相を務めたギリシアの政治家。オスマン帝国支配下のクレタ島・ハニアに生まれる。アテネ大学で法学を学び、1889 年には武力によってではなく、合法的なクレタのギリシアへの統合を主張してクレタの議員に選出される。1906 年にはギリシア国と列強との交渉によってクレタ島のギリシアへの統合において指導的な役割を果たし、1910 年にはギリシア国の首相に任命される。そして「偉大な理想」の実現を目指し二度のバルカン戦争や第一次世界大戦において領土を飛躍的に拡張する。1920 年には王党派とヴェニゼロス派の対立に敗れ失脚する。1923 年に王党派が小アジアでの軍事的敗北により小アジア領を失って後復権を果たすも大きな成果は得られなかった。

<sup>13</sup> ここまで福田 (2017) を参照。

<sup>14</sup> Καζαντζάκης (1993 : 62) : カザンザキスは後の 25 年には特派員としてロシアを訪れ、27 年にはソヴィエト革命記念十周年祭に知識人として招待されているが、この中でアジアやアフリカから招かれた知識人達と出会い、その経験をフランス語で書かれた小説『トダ・ラバ』に昇華させていくことになるが、このようなロシア・アジアといった「東方」での経験に関する重要な出会いである。また、1930 年代には『ロシア文学史』を執

---

筆している(Janiaud-Lust 1970 : 309)。

<sup>15</sup> Καζαντζάκης (1993 : 63)

<sup>16</sup> カザンザキスが仏陀に関して読んだものとして、ヘルマン・オルデンベルクやリス・デイヴィッツの研究書が考えられる。また同年ヘルマン・ヘッセも『シッダルタ』を出版しているが、カザンザキスは書簡において何も言及していない。またカザンザキスはこのウィーン滞在期に仏陀に関する作品を創作しようと試みたが、結局放棄してしまった Janiaud-Lust (1970 : 227)。

<sup>17</sup> Janiaud-Lust (1970 : 186)

<sup>18</sup> Το ιστορικό Τμήμα της ΚΕ του ΚΚΕ (1985 : 24)

<sup>19</sup> Janiaud-Lust (1970 : 194)

<sup>20</sup> Καζαντζάκης (1993 : 100-101) : また同会議で後の 1930 年に書かれる小説『トダ・ラバ』の登場人物ラエルのモチーフとなるラエルに出会う。ビーンもこの会議でカザンザキスが主催者たちと個人的に会ったと述べているが、詳細に関しては触れられていない(Bien 1989 : 65)。

<sup>21</sup> カザンザキスがベルリンに到着して一番初めの妻ガラテアに宛てた手紙の中で、ベルリンにおいても政治活動に関して主にギリシア人達と接触したのではなく、ロシア人と接触を取り合っていたことを報告している(Καζαντζάκης 1993 : 72)。

<sup>22</sup> Γεώργιος Παπανδρέου (1888-1968) : ギリシアの政治家。首相を三期務めた。ゲオルギオス・パパンドレウもカザンザキスと同じくアテネ大学法学部出身であり、バルカン戦争後にヴェネゼロス支持者となりヒオス島の知事に任命されている。1923 年当時はヴェネゼロス派議員として内務大臣を務めていた。

<sup>23</sup> Janiaud-Lust (1970:189-190) :カザンザキス自身 1920 年以降ヴェネゼロスからは決別していたこともあり(福田 2017 :21-22)、カザンザキスがこの時期の反共産主義的なアテネの中央権力とは関わりたくなかったというジャニオ・リュスト推測は蓋然性が高いだろう。

<sup>24</sup> Καζαντζάκης (1993 : 71) : 妻ガラテアに宛てた手紙によるとカザンザキスがベルリンに来た時からの友人で会ったダニイリディスやカスタナキスが、パリで新しい雑誌の創刊費を用意するための計画に協力するよう要請したが、カザンザキスはこれを拒否している。このように独逸滞在期においてはギリシア人と密接に関係を築き接触を図っていた様子は見られない (Καζαντζάκης (1993 : 226)。

<sup>25</sup> Janiaud-Lust (1970 : 227)

<sup>26</sup> 5 月 18 日には 1945 年に結婚することになるエレニ・サミウに出会っている。

<sup>27</sup> Bien (1989 : 90-91)

<sup>28</sup> Bien (1989 : 93)

<sup>29</sup> Janiaud-Lust (1970 : 233)

<sup>30</sup> Καζαντζάκης (1993 : 114) : プラスティラス達が戦犯とみなした政治家達の処刑を行った

---

が、これに言及しながらも自身の意見を書くことを避けている。また同時代の作家で、例えばヨルゴス・テオトカスは『1922年の記録』という短い小説を書き、三人の子供の内二人をトルコ軍によって殺されながらもアテネに難民として送られ、後に生き別れになっていた娘と再開することになるアーナ夫人の物語として描いている。

<sup>31</sup> Καζαντζάκης (1993 : 93)

<sup>32</sup> 村田 (2013 : 189) : Ρωμιοί は、ローマ帝国臣民であり、正教徒かつギリシア語話者という意識が反映された言葉であり、カザンザキスもギリシア人という意味でしばしば使用している。

<sup>33</sup> Καζαντζάκης (1993 : 97) : また「ギリシアは私達の心の中で生きている」とも書いている (Καζαντζάκης 1993 : 81)。

<sup>34</sup> Καζαντζάκης (1993 : 86)

<sup>35</sup> Καζαντζάκης (1993 : 128)

<sup>36</sup> Καζαντζάκης (1993 : 129)

<sup>37</sup> 福田 (2015 : 105)

<sup>38</sup> 福田 (2015 : 107)

<sup>39</sup> 福田 (2015 : 105)

<sup>40</sup> Άγγελος Σικελιανός (1884-1951) : 民衆語で著述した詩人であり、神話時代や古典古代、また聖書などに題材をとった作品を多く残し、「デルフィ的理想」という詩作スタイルを生み出した。主著に『クレタのダイダロス』 (*Ο Δαίδαλος στην Κρήτη*)。

<sup>41</sup> Janiaud-Lust (1970 : 236-237)

<sup>42</sup> Καζαντζάκης (2009 : 64) : 例えば、生(η ζωή)の観念に関しても、暗闇や夜の間の短い閃光のようなものとして理解している点で『禁欲』のそれと一致している (Καζαντζάκης 2007 : 9)。

<sup>43</sup> Καζαντζάκης (2009 : 67)

<sup>44</sup> Bien (1989 : 101)

<sup>45</sup> Καζαντζάκης (2009 : 24)

<sup>46</sup> Καζαντζάκης (2009 : 28)

<sup>47</sup> Χολέβας (1993 : 34)

<sup>48</sup> Καζαντζάκης (2009 : 35)

<sup>49</sup> Bien (1989 : 100)

<sup>50</sup> Bien (1989 : 100)

<sup>51</sup> Καζαντζάκης (2009 : 41)

<sup>52</sup> Bien (1989 : 62)

<sup>53</sup> Καζαντζάκης (2013 : 44-45)

<sup>54</sup> Καζαντζάκης (2010 : 13)